

第41号  
 令和8年7月1日発行  
 発行者  
 一般社団法人 藤香会  
 事務局  
 092-724-0007  
 発行責任者  
 毛屋 嘉明

# 令和8年度総会が開催されました



5月24日(日) 11時より  
 警固神社 社務所ビル会  
 議室で、会員188名(委  
 任状を含む)の出席をもつ  
 て開催されました。  
 山崎会長挨拶  
 田島事務局長の司会の  
 下に、国歌斉唱に続いて、



樋口卓話講師の  
 NHK 福岡放送局長  
 信料制度への疑問〜  
 という演題で卓話があ  
 りました。  
 2026年度の事業  
 収入は96%が受信料収  
 入で賄われている。  
 情報入手の手段を20  
 年前と現在を比較して  
 みると、20年前頃はTV等の放送からの情報入  
 手が半分以上であるが、現在ではスマホやPC  
 経由のネットからの情報収集が過半数でTV等  
 の放送からの情報入手は4分の1程度で年々減  
 っており、さらにこの傾向は継続すると思われる。  
 従って、受信料収入は年々減ってきているが、  
 その理由は①受信料の値下げ、②TVを所有し  
 ない人口の増加、③そもそも世帯数が減ってい  
 る等の理由から減少傾向は続くと思われる。  
 一方各種のメディアから情報を得ることに問  
 題もある。ネット社会では偽情報やフィッシン  
 グ情報が氾濫している。そのような中ではNH  
 Kのような公共メディアは信頼されることから  
 NHKとしての役割があるのではないかと、と思  
 われる。  
 信頼されていけば地域の中で期待されている、  
 と自負している。  
 だから信頼に足る内容の放送ができれば、地  
 域に期待され生き残ることができるのではない  
 かと考えている。  
 と話されて、演題の「受信料制度への疑問」  
 については言及がなかったようです。



今年度は役員改  
 選はなく、理事会  
 での各職務も昨年  
 度通り遂行するこ  
 とになります。  
 すべての審議を  
 終えて、NHK福  
 岡放送局長の樋口  
 大山氏から「NH  
 Kは必要か？」受

審議する出席会員



焼香する会員たち  
 福岡藩第2代藩  
 主忠之公、3代藩主  
 光之公、8代藩主治  
 高公ご三方の法要  
 を墓所のある東長  
 寺で長高様始め会  
 員44名が参列して  
 執り行いました。藤  
 田泰弘師の読経の  
 もと、長高様、山崎会長から会員まで、焼香し  
 て歴代藩主に誠を捧げました。  
 終了後、長高様の挨拶と山崎会長の挨拶があ  
 り、場所を2階に移して、横山謙治さん(新規  
 会員)の「福岡藩贖札事件」と題する講話があ  
 りました。

## 忠之公の第373回御忌法要が執り行われました

この日は朝から暖かい春の陽射しに恵まれま  
 した。本堂では新しく就任された住職の武藤猷  
 厳老師の読経の下、長高様ご夫妻に続いて会員  
 が焼香して如水公の御霊に誠を捧げました。  
 法要の後、裏手にある黒田家墓所の如水公の  
 墓前に法要参列者全員が集合し、僧侶の読経の  
 中、全員で焼香をいたしました。また黒田奨学  
 会の卒業生たちは墓前にて長高様ご夫妻を囲ん  
 での記念撮影も行われました。  
 墓所に1本あるある早咲きの桜も満開となっ  
 て、卒業生の前途を祝福しているかのようでした。  
 前日には市内のホテルにて黒田長高様ご夫妻  
 歓迎懇親会が開催され、62名の参加があり大い  
 に親睦を深めることができました。  
 なお、15日は理事始め会員有志が墓所の清掃  
 を執り行いました。

## 如水公第423回御忌法要が執り行われました



如水公の法要が命  
 日の3月20日黒田家  
 墓所のある崇福寺に  
 て第16代当主黒田長  
 高様ご夫妻をはじめ  
 会員48名と、今回は  
 黒田奨学会からこの  
 春卒業の若さ溢れる  
 18名が参列して法要



今回初めて参列した黒田奨学会卒業生の皆さん

# 博多の商人三傑

会員 天本 孝久

## 神屋宗湛

博多商人三傑のひとつ神屋宗湛は神屋家の六代目で、初代水富は菅原氏で八幡宮管領職を勤めた。

三代目寿貞の時に入明して製錬術を学び、帰国後石見銀山を開いている。その子宗湛は大友氏と親交を結び、大友宗麟家臣の臼杵鑑連(鑑磨ともいう)からの書状も残されている。神屋家は寿貞・宗湛父子によって莫大な財を築くことになる。

### 本能寺の変と「遠浦帰帆」図

天正十年、宗湛三十歳の時嶋井宗室と一緒に、信長に招かれて上洛し、本能寺での茶会に参加する。その夜、明智光秀の乱に遭遇して、床の間に掛けられていた瀟湘八景の内、「遠浦帰帆」とも「煙寺晚鐘」とも言われる牧谿の筆である軸を持ち出した。実際は「遠浦帰帆」の軸であつたらしい。

その後秀吉が宗湛の邸に立寄って茶の接待を受けた時、秀吉が所望したが、宗湛は応じないで「瀟湘夜雨」を献上した。そこで秀吉は宗湛に向かつて「この一幅(遠浦帰帆)図のためにも九尺幅の床をもつた新しい茶室を建てよ。こういうことは利休でも教えてはくれないだろう。」と言ったそうだ。

その後「遠浦帰帆」はどこをどう巡ったか秀吉の手に渡り、秀吉の形見分けとして家康の元に渡った。

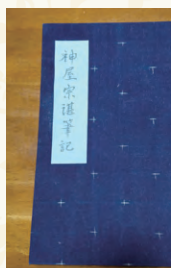
### 秀吉に謁するために上洛

豊後・大友氏と肥前・龍造寺氏との争いで博多は廢趾となった。博多から唐津に避難(疎開)していた宗湛は石田三成の肝入りで、天正十四年十月廿八日、唐津を立てて上洛する。この日から「神屋宗湛日記」は書き始められる。京都での止宿は京都・下京四条の森田浄因宅である。

### 大徳寺での古溪和尚による得度

十一月十八日に京都に着いた宗湛は愛宕山を参詣し、上京にある天王寺屋宗及(津田宗及)を堺に店を持つっていた弟の宗傳を伴って訪れたりしている。津田宗及は利休と共に秀吉の茶頭として三千石を与えられていた。

そして十二月三日、森田浄因方より早朝、大徳寺に向かい、見聞院を訪れると文首座の寮に案内され、そこで朝食を三膳まで馳走になる。食



神屋宗湛日記(宮内庁蔵) 内蔵)として十二月三日、森田浄因方より早朝、大徳寺に向かい、見聞院を訪れると文首座の寮に案内され、そこで朝食を三膳まで馳走になる。食



博多・妙楽寺にある神屋宗湛の墓

後、客殿で古溪和尚に会い、香をひと焚きして剃刀を三度当てられた。後は僧たちの手で髪が剃られ得度して法体となった。その日はそのまま

堺に向かつて帰って行った。

翌日、堺の大安寺・虎蔵主寮に着き、風呂に入ったりしている。内内の宗傳の会事が開かれている。

### 大坂城での大茶会

天正十五年正月二日、堺の鳴尾屋道叱老の会事の所に天王寺屋宗及から「明三日の朝、大坂のお城で関白様が大名衆へお茶の大宴会を催すことになった。ついでには富田左近殿が宗湛を関白さまに引き合わせることにされた。そこで明朝早々に御進物を用意して罷こすように」と飛脚で書状を寄越して来た。

宗湛は、虎の皮二枚、豹の皮一枚、蜀の絹織物三反、沈香一斤を大坂へ持参する。その日は大坂の宿に泊まり、宗及を訪ねたが石田治部少輔(石田三成)の所に行っていたので、そこを訪ねると奥へ呼び入れられ肴や酒が出された。そこで石田治部が言うには、明日は随分宗及が馳走が出るだろうと言ったことであつた。その晩は宗及の所で振舞ひに与つた。そして迎えるの馬に乗って宿に帰つて居る。

そして三日、いよいよ大坂城である。原文は、簡条書きで2条に書かれている。読み下し文で掲載する。

一 正月三日、寅刻(午前4時頃)に御城に罷出候時に御門外にて宗及老御取合にて宗易(宗利休)にて御目掛り候。大小名乗物にて出仕の躰おびただしき様子也。卯刻(午前8時頃)堺衆五人同前に罷出候。先ず廣間に、各同前に罷居候也。奥より石田治部少輔御出有て、宗湛一人計(ばかり)を御内に召連、御茶湯のかざりを一辺拜見させられ候。其後、本の廣間に罷歸、夫(それ)より暫有て、進物を對面の上致候也。其後、堺衆五人則參上候て、御飾を拜見候へとの御説にて関白様御跡より各同前に拜見候処、筑紫の坊主どれそと御尋成られ候へば、宗及是にて候と御申仰出らる候には、残の者ともはのけて筑紫の坊主一人に能見せよとの御説候条、堺衆皆様へ出られ、宗湛一人拜見仕よう罷出候て、暫御飾を見申。関白様御説には、多人数なる程に四十石の茶計(ばかり)にては足まい程に、撫子と奈花の御壺の茶を今挽せて各吞せよとの仰出られ候へば、奈花の御壺宗易、撫子の御壺宗及床より持おろして御茶出され候。又本の所に直し置かれ候。其

より御膳出候也。其時は我々共は罷立、次の廣間に罷居候へば関白様御説に、筑紫の坊主に飯をくわせよと仰出候程に、御前に罷出、大名衆同前に御飯下され候也。左候へば多人数にて御坐敷つまり候程に坐敷の真中に納屋宗久と宗湛とつしろ合て罷居候。其外には京堺の衆、又御通の衆多人数也。其内石田治部少輔御通にて、宗湛同前御馳走成され候。

一 御茶の時に関白様御立寄ながら、御説成られ候には、(多人数なる程に)一服三人づつ吞や。さ候ては鬮取次第を定よと仰出られ候へば内より長さ三寸横一寸程の板に名書付て、小性衆持り出候。御前に投出され候。

それに続いて茶器の飾りの事や茶器が置かれて居る様子、特徴(うぐすりの掛り方や焼物の見た感じ)が詳細に記述されている。

名品を見せる秀吉の得意顔や彼の言葉が息遣いまでわかるように書かれている。何よりも宗湛を大名衆の前で、堺衆とは差をつけるようにもなす様子はまさに「人たらし」と言われる人心取攬の術であらう。秀吉はこの後、九州に遠征して嶋津氏を平定する。その時の兵糧や軍資金を宗湛や嶋井宗室に仰いだことは言うまでもない。

### 博多町割り

天正十五年6月3日、薩摩嶋津家を平定した秀吉は筑前・箱崎に還御して陣を構えた。宗湛は唐津より箱崎に参上して秀吉に謁見した。6月10日にはフスタ船(南蛮船)に乗って戦乱に荒れた博多の市中を見た後、「石城志」に従って原文を読み下し文にして記述する。

「翌十二日より町割を仕給ふ。其経営を黒田孝高に仰付らる。奉行は瀧川三郎兵衛、長東大藏太輔、山崎志摩守、小西撰津守等也。下奉行三十人あり。此処の老人共を呼出し、博多の甲(町)を十甲四方に定め、豎横の小路を割て民家を営み作らせらる。」

こうして黒田孝高の下、現在の博多の町を形作る「町割り」が始まった。宗湛や嶋井宗室が協力したところ(宗室)とは言うまでもない。

この間、秀吉を囲んでの茶会や連歌の会なども開かれて居る。有名な連歌、秀吉の「博多町 幾千代ま でや つのるらん」この発句に続けて黒田孝高(如水)の叔父小寺休夢の句は「立ならべたる 門



宗室)とは言うまでもない。この間、秀吉を囲んでの茶会や連歌の会なども開かれて居る。有名な連歌、秀吉の「博多町 幾千代ま でや つのるらん」この発句に続けて黒田孝高(如水)の叔父小寺休夢の句は「立ならべたる 門



「博多文琳」を黒田家へ 茶入れの名品と言われる博多文琳は中国明時代の焼物で、中国では薬入れまたは薬味入れとして使われていた。秀吉がこの茶入れを欲したが、頑として譲らなかつた。同じように嶋井宗室も「檜柴肩衝」を決して譲らなかつた。これは秋月家の家臣によって盗み出される。そして成敗を免れるために秀吉へ献上される。「博多文琳」については神屋家文書の中の「宗湛由緒書」にある原文を読み下し文にしてみる。

「博多文琳の茶入れ、忠之公召上げさせられ候節、左の通り御判物頂戴仰付られ候」と題して、次の書をいただいた。

「その方所持の茶入れ召上げについては、那珂郡住吉村の内において、五百石の地を宛行華り、領地せしめるべし、並びに黄金千兩遣わし候。右は道居士の遺言に任せ、かくの如く候。然らば茶入れ異儀なく差上げ祝せしめ、褒美として黄金千兩扶助候。都合式千両、右の知行、黒田美作守、小河内蔵允請取り申さるべきもの也」

寛永元年六月廿三日 忠之 花押 神屋宗湛軒 茶入れの「博多文琳」はこうして長政公の遺言があつて、住吉村の五百石の領地と黄金二千兩と引き換えに黒田美作守、小河内蔵允に引き渡され、忠之公の下に移つた。

その後、長い間黒田家の家宝として所蔵されていたが、近年黒田家から福岡市に寄贈されて、福岡市美術館にある。

その後、長い間黒田家の家宝として所蔵されていたが、近年黒田家から福岡市に寄贈されて、福岡市美術館にある。

参考文献 「神屋宗湛日記」宮内庁所蔵版、劉清七郎蔵版、いずれも原文 「神茶室の残した日記」井伏鱒一 1995年6月刊 講談社 「商人集」博多二傳 「江島渡逸大能次郎編録 明治25年6月刊 博文館 「茶史叢書 卷五 茶人篇(一)」 昭和11年8月刊 昭和32年7月復刊 創元社 「石城志 巻九 人事上 昭和32年2月 九州公論社復刻 「博多と茶の湯」 平成2年3月刊 西日本新聞社

# 黒田武士掃苔録(67)

三浦 明彦  
(郷土史家 藤香会会員)

## 6番 井上之房 (いのうえゆきふさ)

1554~1634

○墓所について

龍昌寺・曹洞宗の寺院(福岡県岡垣町高倉)

に墓がある。

○名のりについて

幼名は弥太郎、通称は九郎右衛門、官称は周防、実名は之房、剃髪号は道柏(道伯)。

○人物略伝

播磨姫路の住人、井上之正の次男。小寺(黒田)職隆に仕え、その後職隆の嫡子である小寺(黒田)孝高に仕える。孝高の側近、重臣として活躍、孝高が豊前に入封すると、6000石の知行を与えられる。1600年、孝高改め如水が領土拡張を開始すると、これに従軍して豊後石垣原の合戦に参戦した。石垣原の合戦では、敵方・大友方の有力武將、吉弘統幸を一騎打ちの槍合戦で討ち取るという武功を上げた。統幸は敵味方共に名を知られた武勇者で、立花統虎(宗茂)の従兄弟に当たる人物であった。この後も之房は、如水に従い豊後安岐城、同富来城、豊前香春岳城、同小倉城の攻略戦に参戦している。そして如水・長政父子が筑前へ入封すると遠賀



井上之房の墓(龍昌寺)

郡で16000石を与えられ、黒崎城の城代に任命される。如水の没後は長政・忠之父子の元で家老を務め、特に黒田騒動の際は、忠之を弁護して、忠之を幕府に直訴した栗山大膳と対決している。すなわち之房は黒田家に在って職隆・孝高(如水)・長政・忠之というように、実に4代の主君に仕えたことになる。このように4代の主君に仕えた実績もさることながら、之房の黒田家中における閥閥(けいばつ)は特筆されるものがある。それは之房の妻「玉章院」が如水の妻「お光」の妹であり、如水と之房は妻を通して相婿、義兄弟ということになる。また之房の四男「庸名(もちな)」の妻は長政の長女(先妻との娘)「お菊」である。さらに、之房の長女は黒田正喜(如水の甥、黒田利則の長男)に嫁ぎ、之房の次女は黒田正成(如水の甥・黒田利高の長男)に嫁いでいる。この閥閥による井上一族の繁栄は大きく、之房自身の所領も16000石あるが、四男「庸名」は幕府の旗本に取り立てられ5000石、之房の五男「一利」は父とは別に3000石というように井上父子の所領の総額は20000石を軽く超えている。その他、之房の娘婿二人も黒田家中で高禄を有しており、黒田正喜が6500石、黒田正成が14000石という所領高であった。

さて、晩年の之房であるが、黒崎城が幕府の「一城令」で廃城となったため、遠賀郡陣原に居館を構え、遠賀郡吉木にも別館を構えて住み分けている。こうして寛永11年(1634年)10月22日に没する。享年81歳。ちなみに之房の死後、井上一族は栗山大膳との姻戚関係を追求されて処罰の対象となったり、あるいは無嗣断絶になり、黒田家中の中樞から消えていった。これを「井上くずれ」という。

## 7番 母里友信(ぼりとものお)

1556~1615

○墓所について

麟翁寺・曹洞宗の寺院(福岡県嘉麻市大隈)

に墓がある。

○名のりについて

幼名は万助、通称は太兵衛、官称は但馬、実名は友信。

○人物略伝

播磨国妻鹿の住人、曾我一信の次男、母は妻鹿城主・母里家の出身である。青山・土器山の戦いにて、奮戦の末一族24人が戦死した母里家が絶えるのを惜しんだ孝高により、母里家の名跡を与えられて母里友信と名乗る。少年時代より黒田家に仕え、孝高に近仕して側近に名を連ねる。友信はこれ以降、孝高の元、数多くの合戦に参加、その度毎に先手を務めた。友信は怪力で知られ、戦場では三間柄の長槍を使い、敵を田楽刺しにしたという。そして1587年の九州出兵では、孝高が担当した豊前有留津城攻めで一番乗りの功名を上げた。

また朝鮮出兵においても後藤基次・黒田一成と共に日替わり交代で先手を務め、一度も撤退したことがなかった。ちなみに孝高(如水)が豊前に入封すると6000石の所領を与えられ、栗山利安・井上之房と共に家老職に任命されて



井上之房の墓(龍昌寺)

いる。1600年関ヶ原の合戦の余波で黒田家大阪屋敷に居た如水と長政の正室(お光とお栄)が豊臣方の人質に取られそうになる。この折友信は栗山利安と協力し二人を脱出させ、国元の中津へ送り届けている。中津へ戻った友信は、如水の領土拡張戦に従い、豊後石垣原の合戦に参戦する。この戦いでは敵の総大将・大友義統に降伏を説諭し、降伏を決意させている。友信は大友宗麟の庶腹の娘を妻にしていたので、宗麟の嫡男である義統とは義理の兄弟になり、この縁を以って義統を説得したという。友信は石垣原の合戦後も諸城攻略戦に参戦を続けている。戦後、如水・長政父子が筑前へ入封すると、友信に対して鞍手郡で18000石を与え、鷹取山城の城代に任命した。その後1606年、嘉麻郡大隈城の城代であった後藤基次が脱藩し黒田家中を去る事件があり、この事件を受けて友信が大隈城の城代へと配置転換された。以後大隈城城代としての任を果たし、慶長20年(1615年)6月6日、大隈城中にて没する。享年60歳。また友信には更なる逸話が二つある。まず一つ目が名槍「日本号」の飲み取りである。これは友信が長政の使者として京都伏見の福島正則邸を来訪。その際、正則から勧められた大盃に注がれた酒を二気に飲み干し、褒美として正則所蔵の名槍「日本号」を譲り受けたというものである。この一件は、後世筑前今様「黒田武士」で歌われ、明治になって民謡「黒田節」として日本中に流布され、「母里太兵衛」の名が全国に知れ渡り、福岡の英雄となった。そしてもう一つの話は母里という姓のことである。本来の読みは「ぼり」であるが「もり」とも読めることから徳川秀忠から送られた書状に「毛利」と記されていた。すなわち「もり」という当て字になっていた。仮にも將軍様から出された書状に記されていた文字を誤りとも出来ず、友信は姓を記す文字を「毛利」と改めた。なお書状を記したのは徳川家康だという説もある。

会員クリック<sup>38</sup>



理事 関賢二

藤香会では、令和7年度より、総務担当理事をさせていただき、各行事等では、主に写真撮影係をしております。

私の藤香会への入会のきっかけと父、祖父についてお話をさせていただきます。

会員の皆さまは、旧筑前黒田藩歴代藩主のご遺徳とご功績を顕彰するために、黒田藩ゆかりの人びとや郷土の歴史に関心をもって、藤香会に入会されたものと思います。

父は生前、進藤一馬元市長が藤香会会長をされていた頃から、理事をさせていただいておりました。物静かで、藤香会の活動等の話は家族に余りしませんでした。が、行事等が開催される時は、私は時々開催会場へ自家用車での送りをしておりました。車中では、藤香会の活動・黒田藩の全般的な事柄を世間話し程度のことを聞かされてきました。

多分、間接的に藤香会の活動を理解させようと思っていたのでしょう。機嫌よく帰宅した時は、行事での出来事、会員様との会話した内容の話をしていました。

ある日、何かのきっかけで、「お前も藤香会会員になるように。」と有無を言わず、入会手続きをさせられました。当時私は、現職で働き盛りだったため、減多に藤香会

行事に参加できておらず、父と共に出席した記憶はありません。

父が他界した年に、丁度定年退職後の再雇用契約も終わり、人生の一区切りを終え、これからのセカンド・ライフを考えていました。父の遺志を継いで、藤香会の活動に参加させていただくこととなりました。歴史にうとい私ですが、他理事さま、会員さまのお話を聞いて見聞を広めている所です。すると、最近では自然に歴史物のドラマを良く見るようになってきました。

祖父についてですが、祖父の遺影(写真)が2枚並んでいて、その内1枚には刀を腰帯に差し込み、甲冑を着飾った祖父が写っています。「何で甲冑を着飾っているのかな？」さらには「何で刀まで腰帯に差し込んでいるのかな？」と幼な心で思っていました。祖父も黒田藩に深い関わりがあったのでしょうか。現在はその二つがなぜ存在しているのかは分かりませんが、いつの日かその理由がわかる時が来るか期待しているところです。

日頃の活動から、会員さま、理事の方々から藩史関連を教わり自己研鑽に励んでいるところです。「人生前へ前へ」と捉え、いつも窮地に陥った時は、「あせらず・あわてず・あきらめず」の三つの「あ」で何とか日々を過ごしています。

微力ですが、これからも、会員の皆さまとともに藤香会が更に発展しお役に立つよう努力していく所存です。

ちよつとつんちく

江戸時代に筑前・福岡の歴史が記述された古文書は数多くあるが、なかでも有名なものは貝原益軒が著した「筑前國續風土記」、津田元順・元貫父子の「石城志」がその双璧であろう。また著述者は不明であるが、江戸末期に主として福岡と太宰府の民俗・行事について書かれた「筑前歳時図記」も一顧の価値がある書である。

最初は正月三日の箱崎宮(原文は箱崎八幡宮)の神事玉取(現在は玉せせりといって新暦の同じ日に行われている)。次に正月七日の太宰府のうそ替がある。天満宮ではなく神護寺であった天原山安楽寺の薬師堂で行われ、現在も続いている。

続いて正月十五日の博多松囃子の記述ではその起こりが、安元三(1177)年に平重盛の恩恵を謝すために始まり、慶長四(1599)年に絶え、再び寛永十八(1641)年興るが、明治五(1872)年に福岡県の通達によって山笠や盆踊りとともに禁止された。それでも明治十一(1878)年の紀元節の祝いや大正天皇、昭和天皇の即位大典には参加していた。戦時色が強まる中、昭和十三(1938)年



正月15日の博多松囃子

またしても絶えるが、昭和二十四(1949)年に三度目の復興を遂げ、現在の博多どんたくの中で福神・恵比寿・大黒流の通りもんと稚児舞いとして続いている。「筑前歳時図記」は国立公文書館に所蔵されており、短いまとまった文章の中に筑前の民俗・行事がきれいな文字で書かれ、挿絵も祝詞至善さんや西島伊三雄さんを彷彿とさせるタツチで描かれている。



正月3日の箱崎八幡宮の神事玉取

編集後記

最近坐禅に通ってお坊さんの話を聞くことが多いのですが、その中で「他をして自に同ぜしめて後に、自をして他に同ぜしむる道理あるべし」という言葉に感銘を受けました。自己主張よりも先ず他人の意見を最後までよく聞くこと、その後自分の考えを述べよと言うような意味でしょうか。

人の話をよく聞くようには、森嶋外が自分の子供に常々言っていた言葉だそうです。(天本記)